

「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇(其一)

「浙遊日記」(前半)

薄井俊二 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード: 徐霞客、徐宏祖、遊記、浙江

はじめに

本稿は、明代の徐宏祖(一五八六―一六四一年)による「徐霞客遊記」の訳注である。

徐宏祖(あるいは弘祖)は、江蘇省江陰県の人で、字は振之、号は霞客。地方の名門の出であったが科挙は受けず、白衣で終わつたが、黄道周などの名士と交わつた。

「徐霞客遊記」は全十巻、およそ六十万字程が残るが、そのうち第二巻以降は、一六三六年から一六四一年にかけて、中国西南部をほぼ踏破した旅の記録であり、「西南遊記」とも称される。本稿ではその中から、第二巻「浙遊日記」の前半部分(崇禎九「一六三六」年九月十九日から、同十月十六日まで)を訳出する。

底本は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本(一九八一年)とし、訳注にあたっては、朱惠栄等訳註『徐霞客遊記全訳』(貴州人民出版社、一九九七年)等を参照する。

紙幅の関係で、口語訳と簡単な語注のみとする。詳細な注釈は、別途インターネット上で公開する予定である。

徐霞客の自注は「」で示す。

掲載の地図は、「中国百万分一地図(上海・武漢)」(中国西安地図出版社)を加工したものである。

概要

西南遊記は他の記とは異なり、自宅を出発するところから記述を始める。彼の家は、明の南直隸常州府江陰県馬鎮(今の江蘇省無錫地級市江陰市馬鎮鎮。以下()で現在の地名を記す)にあった。そこから船で無錫・蘇州を経、佘山(上海市松江区内)に陳継寿を訪ねる。その後西に転じ、杭州に至つて旅の準備をする。西湖西岸の飛来峯などを探索した後に、本格的な旅に出る。杭州から西へ徒歩と輜で陸行し、新城県(杭州地級市富陽市内)の洞山で洞窟を探索。その後南に下り、船に乗り、桐廬県を経て金華府城に至る。ここから北の金華山(北山)に登り、金華三洞・蘭溪の洞を探索する。その後、再び船に乗り、新安江を遡つて、常山県(衢州地級市常山県)で上陸し、輜で西に進んで江西省に入る。

浙江省での主な探索先は、杭州の飛来峯、新城県の洞山と金華県・蘭溪県にまたがる金華山である。

浙遊日記旅程図

崇禎9 (1836) 年9月19日~10月16日

舟行
陸行



訳注

崇禎九年（丙子の年）九月十九日 私はかねてより西南への旅行を志していたが、延び延びになって二年が過ぎてしまった。老いや病いがしのびよりつつあり、このまま先延ばしにすることは難しいと考えた。黄石齋先生が来てくれて会うのを待っていたが、先生からの音信は全くない。族兄の徐仲昭と別れの挨拶をしようと思うのだが、彼も南からここへやって来ない。そこで昨晚、土瀆莊へ赴いて彼に会った。今日出発する計画だったが、ちょうど杜若叔父が尋ねてきた。一緒に夜中まで酒を酌み交わす。酔いのままに舟に乗り出発する。同行は静聞禅師である。

「注」黄石齋先生：黄道周（一五八五―一六四六年）。明末の文人政治家で、学行ともにすぐれていたが、しばしば高官と対立することがあった。徐霞客とは親交が深かった。

二十日 空がまだ明けないうちに、無錫県城に着く。明け方くらいに、先ず人をやつて王孝先に通知させ、自分は王受時に会いに行ったが、彼はもう外出していた。そこですぐに王忠紉のところを訪ねる。王忠紉は私を引き留め、ともに酒を酌み交わして午の時に至った。そこへ王孝先がやって来て、ほどなく受時も帰ってくる。私はとくに酔っていたが、更にまた王孝先と一緒に王受時のところへ行って酒を酌み交わす。王孝先は顧東署の家族への手紙を私に託す。「当時東署は、蒼悟道で長官をしていた。その手紙は、息子の顧伯昌が寄託したものである。」深夜まで飲み、やっと舟に入る。

二十一日 再び無錫県城に入って王孝先に会い、再びしばか

り酒を酌み交わす。

午前船を出発させ、暮れには蘇州府呉県の虎丘を通り過ぎ、半塘に泊まる。

二十二日、早朝に仲昭のために半塘で竹の椅子を買う。

昼過ぎに文文老の息子に会いに行き、あわせて閶門（蘇州城の門）で買い物をする。

晩に封門（これも蘇州城の門）に族兄の徐含暉に会いに行く。顔を合わせるやいなや、彼は泣き出し、涙が顔中をおおった。私は思わず憐憫の情に駆られた。思うに、含暉はこの蘇州の地に隠棲すること十五年になるうとしており、私と仲昭とでしばしば訪ねたものであった。故郷を離れてさすらい、更に家は破産し子どもも死んでしまったのだが、それでもなお詩文を楽しんで悲しみを慰めていた。それがここに至って以前とは異なることになっていた。

孫が彼から無心することやまず、加えて逆らい悖るという不孝者となったからである。そこでまた私の小舟まで一緒に戻り、少し酒を酌み交わす。彼は私のために諸楚璵への手紙を書いてくれた。「諸は横州（広西壮族自治区南寧地級市横県）の長官であった。」夜半になって含暉と分かれる。

二十三日 再び閶門に行き、染色を依頼していた紬と表装を依頼していた書帖を受け取る。

午前中に船を出発させる。

東に七十里進み、晩に崑山県（崑山市）に至る。

また十里あまりで、内村に出、青洋江を南へ下る。（呉淞江への

入り口に着き）江を横切つて渡り、東岸の小さな橋の傍に泊まる。

二十四日 夜明け前に出発する。

二十里進み、綠葭浜（崑山市陸家鎮）に至つたところで、やっと夜が明ける。

正午ごろ、松江府青浦県城（上海市青浦区青浦鎮）を過ぎる。

午後に婁県の余山（上海市松江区内）の北に到着する。そこから静聞とともに上陸し、山中の塔凹の道を選んで南へ進む。最初にひとつの荒れ果てた園庭の側を通り過ぎる。ここは八年前の中秋節に歌舞をしたところである。いわゆる「施子野の別荘」である。

この年、子野は美しい園庭に歌手を召し出した。陳眉公は私と一緒にここを訪ね、妖艶な宴を楽しんだのであった。その後三年たないうちに、私は長卿と一緒にここを訪ね、再びその景勝を尋ねようとしたが、施設設備は残っていたが、住む人は風雅を解する人ではなくなっており、つまらないものになってしまっていた。

もはや持ち主が替わつたかの感があった。（實際兵部侍郎の王念生という者の手に渡っていた。）そして今は壊れた台と崩れた垣が残るばかり。三度訪れて、三度その姿を変えている。滄桑の変というが、全くその通りだ。塔凹を越えようと、寺があるが、門がもはや無くなっている。ただ大きな鐘が、木々の間に懸けられているばかりである。そして山の南側にあった徐氏の別荘も、持ち主が替わっている。そこで（心配になつて）急いで眉公の頑仙廬へと足を急がせる。眉公は客が来るのを遠くから眺めると、先ずは走って家の中に逃げ、避けようとした。ところが、人に問うて、客が私であることが分かると、再び家から出てきて、私の手を引いて林に

入る。ともに酒を飲み、深夜に至つた。私は暇を告げようとしたが、眉公は私のために雲南の雞足山の二人の僧侶（名は弘弁と安仁。）に手紙を書いてくれることとなり、もう少し留まるよう、強く求めた。そこで舟を出すことができなかった。

〔注〕陳眉公：陳繼儒（一五五八—一六三九）。博覽強記、詩書画にもすぐれたが、世人との交わりを極力避け、しばしば詔勅もて召されるも、病と称して辞退した。徐霞客とは親交が深く、彼に「霞客」の名をつけたのも眉公であった。

二十五日 早朝、眉公はもう、私のために二人の僧侶への手紙を書いてくれていた。更に礼物を私に調えてくれた。また引き留めて朝ご飯を振る舞ってくれる。さらに王忠紉の母親の長寿を祝う詩を二枚の紙に書いてくれ、加えて紅香米を使つてお経と仏画を描いて私に贈つてくれた。

午前、やっと出発する。思うに、これまでは東へと迂回する道のりであり、ここからが西へ向かう旅の始まりである。

三里で、仁山（松江区辰山）を過ぎる。

さらに西北に三里で天馬山（松江区内）を過ぎる。

さらに西に三里で横山を過ぎる。

さらに西に二里で小崑山を過ぎる。

さらに西に三里で泖湖（泖河）に入り、河を西に横切り、泖寺のそばを掠めて進む。寺は川の中州に立ち、重なりあつて高く聳える台閣を誇り、まさしく五層の仏塔であり、層をなす波の光と映え合っている。これまた水郷の景勝地であるといえよう。

西に慶安橋をくぐる。

十里で蘇州府長州県の章練塘（青浦区練塘鎮）である。（ここは長洲県の南の境で、ここもまた一万戸の大商業都市である。）

さらに西に十里で蔣家灣（嘉興地級市嘉善県盛家灣か）である。ここは既に嘉興府嘉善県である。

夜を押して行こうとしたが、群集する舟を驚かせてしまった。そこで速やかに丁家宅（嘉善県丁柵か）で泊まることとする。（ここは嘉善県の北に三十五里の地にあつて、とりもなおさず尚書の改亭公の故郷である。）

二十六日 二つの沼沢を過ぎ、十五里で西塘（嘉善県内）である。

ここも亦た大きな鎮である。ここで夜が明けた。

西に十里で下圩蕩（夏墓蕩か）である。

さらに南に二つの沼沢を過ぎる。

西に五里で唐母村（陶墓か）である、ここで初めて桑があつた。

さらに西南に十三里で、秀水県の王江涇（秀州区内）である、こ

この市はたいそう盛んである。

ここから真つ直ぐ西に二十里ほど進み、（一旦蘇州府呉江県に入つて）瀾溪に出る。

（瀾溪を）西南に十里進むと秀水県の前馬頭（錢碼頭）である。

さらに十里で師姑橋（思古橋）である。

さらに八里行くが、まだ太陽は沈んではない。しかしここから烏鎮まではまだ二十里はある。盜賊に遇うのを警戒し、十八里橋の北の呉店村浜（胡店村か）に泊まることとする。（ここは呉江県に属す。）

二十七日 夜明けに出発する。

二十里で桐郷県の烏鎮（嘉興地級市桐郷県内）に至る。舟を降り、町に入つて程尚甫を訪ねる。（ところが）彼はちょうど虎埠に遊覧に出かけていて留守であり、二人の息子が出てきて挨拶してくれる。持参した金銭を渡し、この数年間に借りていた書籍代を返した。かくして出発した。

西南に十八里で、湖州府歸安県の連市（湖州地級市南潯区練市鎮）である。

さらに十八里で、寒山橋（含山か）である。

さらに十八里で、徳清県の新市（徳清県新市鎮）である。

さらに十五里で、曹村（徳清県内）である。まだ晚には間があつたが、泊まることとした。

二十八日 南に二十五里行くと、杭州府仁和県の唐棲（杭州地級市余杭区塘棲）に至る。風向きが舟行に便であつた。

五十里で、北新関に入る。

さらに七里で錢塘県の桜木場（松木場）に至る。わずかに昼を過ぎたところである。私は召使いを遣つて杭州城に入城させ、曹木上君のところへ行つて黄石翁（道周）の行跡を尋ねさせた。しかし彼はまだ南から来ていなかった。当時木上自身も、南京に国子監として出ており、石翁の行跡を問うすもなかった。そこで船中で手紙を書いて、曹木上の家に投じ、返事は舟に返してもらつて立てを取った。それはこの後、私の行く先は遙か遠くとなり、手紙を届けてもらうのも難しくなるからである。

晩に昭慶寺を訪問し、舟に戻つて泊まつた。

「語注」昭慶寺…杭州西湖北岸にあり、五代吳越時代創建と伝える古刹。今は廃寺となり少年宮となっている。

二十九日 仲昭兄と陳木叔に手紙を書いた。静聞君は浄慈寺と吳山に遊びに行った。この日も、舟に泊まった。

「注」陳木叔…陳函輝（一五九―一六四六）。徐霞客とは懇意で、彼の死後「徐霞客墓誌銘」を撰している。 浄慈寺…西湖南岸の南屏山北麓にあり、五代後周創建と伝える古刹。

三十日 早朝に城内に入り、手紙を自宅へ届けてくれる人を備い、寄託した。

お昼に、一旦船に戻り、荷物のうち重たくかさばるもの（余山で陳眉公から贈られた仏画などであろうか）を選び分け、自宅へ送る手配をする。私はといえば、静聞君とともに西湖を渡り、湧金門（西湖から城内へ入る門のひとつ）から城内に入って銅の炊飯俱（鍋）や飲料水を入れる竹筒などの旅の諸道具を購入した。

晩になり、朝天門（城内の門のひとつ）から昭慶寺まで歩いて戻り、そこで入浴して泊まることとする。

この日はまた湛融師から十両の銀を借り、旅費の足しとすることができた。

十月一日 天氣が最高に明朗で爽快であるが、西北の風がとても厳しい。

私は静聞君と一緒に寶石山の頂に登った。山頂に巨石が積み重なっているものがある、これが落星石である。峯の西側の岩山が

最も険しく聳えている。南には西湖の湖面の光を望み、北には臯亭や徳清島の諸山を眺め、東には杭州城内から立ち上るたくさんの人家の煙を見る。すべてがはっきりと明らかに見える。

山を五里ほど下り、岳飛の墓を過ぎる。

さらに（西に）十里で飛来峯に到る。市街で昼食を取り、その後峯下の洞窟群を巡る。

おおよそ飛来峯は楓木嶺から東に延びてきて、靈隱寺の前で屏風のように並び立ち、この場所で山峯が終わって石がむき出しになっている。こここの石には皆穴が空いており、表玉のように照り輝いている。三つの洞窟が並んでいる。それらの洞はともに混じり合って区別が付かなくなっており、奥深さを表していることはない。かつては楊和尚の彫刻によつて破壊され、いまや乞食どもの喧噪に汚されている。しかしちょうどこの時だけは、乞食どもが静かにしていた。山間に見える石はさわやかで、猥雑な喧噪も全く聞こえない。あたかも青山がその内部をきれいに洗い、蒼天がその外側を洗い流したようであった。私は洞の下を経めぐつては、山の頂に登った。洞頂の靈妙な姿の石は天に向かって集まるように屹立し、奇怪な格好の樹木は風に吹かれてその姿を動かしている。洞頂に座つて辺りを眺めれば、かの西王母の住まいだという群玉山にも劣らない趣であつた。「飛来峯はかつては靈隱寺に所属していたが、今は張某の所有となっている。」

山を下つて谷川を渡ると靈隱寺である。一人の老僧がいて、法衣をまとつて台の上に黙座し、空を仰いで太陽の光を浴びながら、長い間一度も瞬かないでいる。

次いで方輪殿に入る。殿の東に新しく羅漢殿を建築しているが、

五百羅漢のうち半分しかできていない。おそらく残りは西側に設ける羅漢殿に作るのであらう。

ちょうどこの日は、美しいご婦人たちの集団が二三、相次いでこの寺を訪問していた。ただよってくる女性の香がまことに艶麗であった。このご婦人がたの来訪と、先にみた老僧が太陽の光を浴びながら黙座し続けている姿とは、どちらも滅多に出会えないものである。そこでしばらくこの寺でぐずぐずと過ごす。

午後に、包圍から西に行つて楓樹嶺に登る。そこを下つて上天竺寺に到り、さらに中・下の二つの天竺寺に出る。再び下天竺寺の後ろに順い、西に後山に沿つて進み、「三生石」のところへ到る。この石は、ただ姿がこつこつしているだけではなく、表面が清く潤つていてすばらしい。この場所は、靈隱寺の向かいの屏風のような山峯の南麓で、その嶺はここから東に延びて飛來峯で終わつてゐるところであつた。優れた景勝を独占するものである。

下天竺寺から五里で毛家歩（茅家埠）に出、そこから湖を渡る。太陽は既に西の山に落ち、昭慶寺に帰り着いたときはすっかり宵闇に包まれていた。

「注」靈隱寺：中国禅宗十刹のひとつ。東晋時代、インド僧慧理が飛來峯を天竺の靈鷲山になぞらえ、庵を築いて靈隱寺と名付けたという。周囲には、五代から宋・元代に作られた仏教関連の塑像が三百点あまりも残されている。

楊和尚：原文「楊髡」。元代のソグド人チベット仏教の僧侶、楊璉真加を指す蔑称。彼は僧皇帝の墓を暴くなどの悪行を重ねたとして、明清時代に至つても江南の士人から憎悪されていたが、飛來峯に自らを模した仏像を作らせていたとも言われる。上天竺寺：五代後晋創建と伝える古刹。法喜寺ともいう。中天竺寺：隋代創建と伝える古刹。法浄寺ともいう。下天竺寺：

東晋創建、隋代重建と伝える古刹。法鏡寺ともいう。

二日 午前には桜木場を出発し、（北に）五里で觀音閣（杭州市拱墅区内）に出る。

（ここから）西に十里進むと女兒橋（西湖区内）である。

さらに十里進むと老人鋪（同）である。

さらに五里で余杭県の倉前（余杭区内）である。

さらに十里進む、余杭溪の南に泊することとする。何樸庵の家を訪ねたところ、彼は一日違いで、杭州城に出かけたとのことであつた。

三日 余杭県城（余杭区内）の南門橋で、担夫を傭う。西門から城外へ出て、苕溪の北岸沿いに（西へ）進む。

十五里で丁橋鋪（丁公村か）である。

さらに十里進む、馬橋を渡ると、余杭県と臨安県との境界である。（その北は、徑山に達する。）

さらに二里で、臨安県の青山（青山鎮）である。市街はとも賑やかである。溪流と山とが次第に近づき、また二つの尖った峯が向かい合つて聳えている。（ひとつは紫薇峯で、もうひとつは大山である。）

さらに十五里で、再び山が開け、十錦亭に到る。亭の北から来て西に行く一路は、於潛県から徽州へ行く道である。亭の南を通つて西に行く一路は、つまり臨安県城への道である。

亭の西から南へまた一里で、ひとつの石橋が溪流の上に跨つていた。長橋という。

橋を渡り、南にまた一里で、臨安県城（臨安市）の東関に入る。

そのまま西関を出ると、「臨安県は城壁がとても低く、県署もぼろぼろである。」その外は呂家巷である。その市街は臨安県城よりも却って盛んである。

さらに二里で皇潭（横潭）である。その市街地は呂家巷と同じくらいである。その西で道が南北に分かれる。北への道はこれもまた於潛県への道で、南の道が新城県へ到る道である。

（そのどちらも選択せず）ほどなく再び山なりに西南に向かって進む。

さらに八里で高坎（臨安市内）である。ここからやっと筏を浮かべて通れる水流がある。

さらに三里で南に曲がって梟柳塢（孫家頭か）に入り、再び山間に入る。

五里で下圩橋（夏家橋か）である。橋の南から溪流を遡って西へ上がる。

二里で全張村（前張村か）である。村中の人の姓が張の家族である。分水県に向かう者は、新嶺を脇道とし、全張の道を回り道とする。私が聞いたところ、新嶺の道は狭く、泊まる所もないと。

そこで結局全張の白玉庵に泊まることとする。庵主の意という僧侶は余杭県の人であった。私が旅遊を好んでいると聞き、深夜であるにも関わらず、灯火をともし、お茶を沸かしてくれ、私に彼が日本に旅遊したときのことを語ってくれた。そのことはとても詳細であった。

四日 夜明けに食事を作り、黎明に西に出発する。

二里で橋を過ぎる。

そこを南に折れ、さらにまた六里で乾塢嶺（甘塢里、臨安市の内）を上っていく。この山路は甚だ平坦である。思うに、於潛県の山々は西からやってくる山脈である。東西には高峻な山嶺があるが、ただこのあたりは峡谷となつて低くなっている。山の背を越えるあたりも一丈ばかりの巾しかないが、南北両面には棚田が重なりあつて広がっており、水田を形成している。ここから北への流れは下圩橋に到り、青山鎮から苕溪に注ぐ。南への流れは沙宕に到り、新城県から錢塘江に注ぐ。こんな低い丘が分水嶺となつていゝとは思ひもよらなかつた。この山脈は更に東に進み、ついには天に向かつて突き立つような、五尖山となる。「五尖山に東北が、新嶺である。」

五尖山の西麓沿いに進み、さらに五里で唐家橋（塘家橋、ここから新城県「今の新登県」を過ぎると、新城県の北の境域である。白い石の崖が南に壁のように立ちはだかつており、そこで川の流れに沿って西南に進む。

五里で華龍橋である。西の塢から流れてきてここで合流する川がある。

橋を渡り、南へ小さな峠を一つ越える。

二里で沙宕に到る。前に石橋がひとつあり、川を跨いでいる。趙安橋という。ここを渡れば、新城へ向かう道である。

（しかし渡らず）橋の北を西に、小川を遡って進む。三九山の北麓に沿って進み、後葉塢（後楊塢）に入る。「三九」という名は、山の東側を趙安橋から南へ下ると朱村（万氏鎮）に至り、北側を趙安橋から西南に行けば白粉牆（白粉塘）に至り、南側を白粉牆から東南に行けば朱村に至る。この三面の道のりが、いずれも九里だ

からの命名である。

後葉場より九里で白粉牆に至る。このあたりは三九山から北へ延びた山嶺である。ただその山嶺もとても平坦である。東の流れは後葉場から趙安橋に出、西の流れは李王橋から朱村に流れ、そこで合流する。これも「三九」という山名の由来であり、水流が山をあますところなく廻っているからである。

白粉牆の西に二里で羅村橋（羅宅村）がある。北から流れてくる川がある。枝分かれして北へ向かう道もある、これも新城県へ至る道である。

川沿いに南に一里程行くと、鉢孟橋である。西の龍門龕（龍門橋）から流れてくる川がある。「龕には四仙傳道嶺があり、鉢孟橋の西に四里の所に在る。そこが於潛県との境である。」

橋の北から東に転じ、一里ほどで南に折れる。ここは東が三九山、西が洞山で、円形の山塙を形成しており、東西にはごつごつした岩山が見える。その石の黒さは漆を塗ったようで、その間に赤い楓や黄色い銀杏、さらに緑なす竹や松がまじり、彩絹のようである。その中で岩壁から浸みだした滝が、雪のように白くなり、石を洗って落ちている。現在は水流が乏しく滞留するほどのものはないが、黒い崖や白い溪谷が、あちこちに練り絹を懸けたように見える。私はすばらしい景勝であると感じた。

二里で李王橋を渡る。ついに洞山の東麓に達した。急いで荷物を呉氏の先祖を祭る祠に預ける。召使いに食事のできる店を探させたが見つからない。すると二人の呉姓の人達が来て、ひとりはお食事のしたくをしてくれ、もうひとりはお灯火を用意して洞窟に案内しようとしてくれた。私は魚公が書いた扇をお返しにプレゼン

トした。「洞山は、龍門龕の南からうねうねと東に伸びたもの。その石質は角が尖り、重なりあう紋がある。東南の山の半ばにふたつの洞が口を開けていて、そこから李王橋の下を眺めることができる。」私はそのまま静聞君と一緒に西に向かって山を登った。

小さな溪流に沿って登る。その石は峡谷に蹲ったり、崖から飛び出しているかのようで、そこに清流が注ぎ、せせらぎの音を立てている。溪流の兩岸に踊り出でている石片はまるで田畑の畦のようで、斜めに立っているものは畦のようで、突起しているものは平らな台のようである。竹が石の中から生えていて、枝は石の上に聳えているのに、根の部分は見えない。その幹は岩の頂を覆はんばかりで、隙間も見えないほどである。

（しばらく見物した後）再び登攀を開始すると、忽然として大きな岩が溪流を塞ぐように立っている。まっすぐすっきりと独立していて、表面にある微細な石紋は風に吹かれて波打つ縮緬のようである。靈妙奇異の極みである。

（しばらく鑑賞した後）再び登れば、丈の長い竹藪の中に、新築の睢陽廟があった。雪峯をまつる石室がそこにあった。「そこはまた靈隱庵とも称されている。」庵の後ろは切り立った岩壁が空に向かい、屏風のように重なりあって青々と聳えている。

その屏風の南が明洞である。樓閣の軒がそこで開いているかのようで、外には五本の脊柱が突き立っている。まさに四明山の「分窓」のようである。「ただし、四明山のものは石の色がやや劣っており、ここの石柱が巻くようにまがっているのには及ばない。」その中の一本は、上に伸びているが軒の底には至っておらず、底か

らも石が垂れているが下の柱までは至っていない。上下にあい対して、その隙間は二十センチメートル以下しかない。石柱のそばに一本の樹木が有り、すつくと高く生えている。上の洞窟の庇にぶつかったところですぐに外に曲がっている。その木の緑は巖を覆い、黒い岩肌と映え合って明らかである。

その南に、幽洞がある。この二洞は並んで口を開けており、その中間の岩肌は、桃の花のような淡い紅色をしている。洞口は高いところにあり、その入り口は閘門が空に向かって傾いているかのよう。洞内に向けて呼声を発すると、ずっと響いていてなかなか消えない。おそらくその中は空洞で、底なしに続いているのであろう。

(さらに進み)二十丈も行かないうちに、たちまち北へ南へと一転している。

北は乾いた洞がある。石段を登るが、まるで楼閣を踏み上るかのようである。三十丈で、また南に転じ、一軒の小さな楼閣があった。奥深い静けさを感じる。

南は水を湛えた洞がある。水はひとめぐりすると、すぐに仙人の水田をなし、畦が何層にも整っている。水が水田に満ち満ちており、外に漏れ出ることもなく、かつ干上がることもない。人は畦を踏んで曲がりながら洞に入る。およそ二十丈進むと、忽然として滔々とした水音が聞こえる。小さな門をくぐって進むと、一本の小川が南から流れてきて、ここに至って谷を突き破って流れ落ちて見える。ぐるぐる廻って落ちていて、底が見えず、ただ水音を聞くのみである。

溪流に沿って南に進み、また峡谷をひとつ越える。先には小さ

な門をくぐって入ったので、(さらに進むためには)水の中を通過して行かなければならない。そこで上衣を引っ張り上げ、ズボンも脱いでしまい、流れに入って遡っていく。

また三十丈ほどで、溪流の中に鍾乳石が生えており、蓮華のように倒れかかり、その先端が象の鼻のように曲がっている。そこは平らな砂地と狭い門口とが次々と連続し、狭まったと思ったら広がっている。「それはちょうど荊溪の白鶴洞のようだ。ただし、白鶴洞は山の麓に潜んでいるので、水を得るのも容易だろう。しかしこの洞窟は、山の頂に高く口を開けているものであり、水がたくさんあるのは本当に不思議なことである。」

また進むと、洞窟はおしまいになっていた。そこには水が集まり湛えられていたが、それほど深くはなかった。また集まっている水がどこから来て、どこへ流れ落ちているのかは分からない。洞窟を出ると、半日の間に何十年もたったような感じがした。

洞山を下り、呉氏の祠で食事を取る。

さらに南から来ている溪流を遡り、二里で太平橋に至る。この橋の西側には高姓の人が住み、東側には呉姓の人が住んでいる。彼らもまた李王橋の呉姓の人々の一派であらう。ここにもまた先祖を祭る祠があり、とても広々としている。

その頃は、まだ太陽が天空にあったが、担夫の家が近くで、帰って休みたいというし、馬嶺あたりには宿泊できるところもなさそうなので、その祠に止宿することとする。

この日は、進んだ距離はわずか三十五里であったが、遊覧した二つの洞窟は、どちらも予定外のもので(すばらしいもので)あ

った。誠に幸いなことであつた。

晩は風が吼えるように吹き荒れて雲が垂れ込めていたが、明け方になって風はやんだ。

「注」睢陽廟…安録山と闘つた張巡を祀つた祠か。 洞山の洞…清代の新城県志によれば、霊隠洞と称されていたらしい。

五日 鶏が二度目に時を告げる頃、召使いを起こし食事を作らせる。食事ができると、自宅に帰っていた担夫もやつて来た。ところが、これまですつと隨行していた王二という担夫は逃亡してしまつていた。

朝食ののち、あれこれ手を尽くして他の担夫を捜し求め、ずいぶん時間を費やしてからやつと出発する。

南に二里で、馬嶺（新城県と於潜県の境）を上る。一里ばかりで峠に達する。「この嶺以北は新城県に属する。川の水も新城県へ流れる。馬嶺の南は於潜県である。県城はここから西北五十里の地にある。川の水は応渚埠から分水県に流れる。」

馬嶺を下り、南に二里で内楮村塢（於潜県内）である。

また一里で外楮村塢である。ここから南は家々は楮を生業としてゐる。

山塢に沿つて西南に七里進み、兌口橋を過ぎる。岐路が南北に分かれている。「北は於潜県に達する。四十里くらいだろう。」南は応渚埠に至る。十八里である。兌口橋を流れる水は、北の於潜県から流れてきて、馬嶺の水は東から流れてきて、ここで合流して南に流れる。道もこの流れに沿つ。

八里で板橋を過ぎる。橋の下を流れる水は西の塢から来て、前

面の川と合流する。「この川を遡つて西に行けば、その道は於潜県から昌化県に達する。」

また南に五里進むと保安坪（保安村）である。

また一里で玉澗橋である。「橋はとても新しく、まちも賑やかである。この橋はまた排石橋とも言つ。」ここで山がおおいに開けた。

また東に二里で、唐家拱で停留する。この地は応渚埠（印渚鎮）の北二里にある。もとよりここには市や店はない。担夫が言うには、応渚埠から桐廬に下る船は、北へまがってここを通るとのこと。そこで溪流の岸に停留したのである。しばらくすると桐廬への船に出会えた。「思うに応渚埠は於潜県の南の端で、川の南はもう分水県である。於潜県の川が北の方から玉澗橋を経由して（南下し）、昌化県の川が西の麻溪埠より流れてきて、どちらも応渚埠で合流する。かくしてここで水勢が盛んになるのである。しかし玉澗橋より上流は（水量が少なく）船を浮かべるのに耐えない。一方麻溪埠より上流は、小舟でそのまま昌化県に遡れる。於潜県の川は昌化県のそれには及ばないのである。」

時に太陽が既に南中しているが、食材を買い求める店がない。（少し上流の）応渚埠で買い求めたいと思つたが、船は待つてくれない。そこで（食材はあきらめ昼食抜きとし）船とともに行くこととした。

船で川を下り、東南に十里進むと、嚴州府の分水県（桐廬県分水鎮）である。県城は川の西岸にある。分水県の地は、川は東南に流れる一水があるのみである。県城の西は山は開けてはいるものの、陸路だけであり、八十里で淳安県（淳安県）に達する。私ははじめはこの道をたどろうと思つていたのだが、召使い（担夫）の

王が逃げてしまったため、陸行は不便である。そこでやむなく水行を選び、逆の方向の東南へと進む。

分水県を東南に二十里で頭鋪（畢浦）である。

また十里で、桐廬県の焦山である。店舗や市場が賑やかである。已に日が暮れたが、食材を買うことができない。そこで水主の残りを借り、飯を炊く。

水主は流れに沿って夜も櫂をこぐ。

五十里で桐廬県城の旧県（桐廬市内）に達する。夜も半ばを過ぎていた。

六日 鶏が二度目に時を告げるころ、船を出す。明け方に富春江へ出る。ここはもう桐廬県城のエリアである。

従僕を起こして食材を買いに行かせ、この船に載せる。

十五里で灘上に至る。穀物を運ぶ船が百艘あまりもあり、荷物を登載するのを待っている。そのため私が乗った船も停泊せざるを得ない。速やかに食事を求めて食べる。食べ終わると、別の船を求め、得られたのでそちらに乗り移って行く。時に已に午前になっている。

また三里で、清私口（清渚港か）を過ぎる。

また三里で、七里籠に入る。東北の風がとても航行に便がある。

うたた寝をしていたら、嚴子陵釣台を通り過ぎていた。

四十里で、建德県の烏石関である。

また十里で、建德県城（建德県梅城鎮）の東関の宿屋に宿泊する。

「注」富春江…錢塘江の上流にあたる大河。 七里籠…七里瀨ともいい、富春江中の難所であり名所。嚴子陵釣台…富春江岸に聳える岩山。漢代の隠者

嚴光が隠遁し、ここで釣りを楽しんだと伝え、多くの詩人がここで詩を詠んでいる。

七日 霧がたちこめていて何も見えない。水主が食事を終えてから出発する。

午前に再び晴れる。

七十里で香頭に至り、ここで暮れてくる。「香頭は山の北側にある大集落である。張と葉という姓のもので、高官になるものがたくさんいる。」

月が明るく、風も便がある。

二十里で、金華府の蘭溪県（金華地級市蘭溪市）に宿泊する。

八日 早朝に浮き橋に上陸する。橋の内外にたくさんの船が鱗のように並んでいる。（西の）衢州からの朝廷の軍隊が到着しようとしており、浮き橋を封鎖して船を繋ぎ留め、通行させないようにしていたのであった。そこで荷物を顧従者にまかせて南門の旅館で保管させ、私は静聞君とともに、金華山の三洞への遊覧をしようと考えた。

思うに、金華の山々は、東西に横たわって聳え、金華府城はその南にあつて、浦江県（浦江市）がその北にある。山脈の西の端は蘭溪県で、東の端は義烏県（義烏市）である。婺水という川が東南の永康県（永康市）から流れてきて、金華市の南門を経由して西北に向かい、蘭溪に至って衢江と合流している。

私ははじめ、陸路で金華山へ行こうと考えていたが、婺水を遡って東へ向かっている船があるのを見た。そこでそれに乗って行

くことにした。

川は砂地の岸边の間を流れ、周囲の山々は遠景である。赤い楓の花が粗密様々に咲き乱れ、錦のカーテンを集めたり彩霞を裁断したかのようである。それが重なる山々に映えて、まことにすばらしい風景である。その前に金華山が天に向かって聳え立ち、あたかも屏風を背負っているかのようである。そして私たちは、それらに背を向けて東南に進んだ。

（そのうちに、同舟の人に）「三洞はどこにあるのですか」と質問すると、「ここから北にあります」という答えが返ってきた。

（重ねて）「金華府城はどこにあるのですか」と問うと、「南にあります」というではないか。

そこではじめて、三洞に行くには必ずしも金華府城まで行く必要はなく、（蘭溪県から）半日も陸行すれば、（金華府城への）道の半ばで山に行けた、ということが分かった。しかしすでに船に乗ってしまっているの、どうしようもない。

四十五里で小さな溪流に至った。已に日も暮れ、月が洗ったかのように輝いている。

さらに十五里行つて陸にあがる。下馬頭の旅館に投宿しようとしたら、深夜であることから門を閉ざして入れてくれない。（ちょうどそこへ）王という姓の人（号は敬川といい、高橋埠の人であった。）が、月明かりの中を家に帰ろうとしているのに行き会った。旅人（つまり徐霞客ら）が泊まる場所がないのを見て、金華府城の西門まで連れて行つてくれて、一緒に旅館に泊まらせてくれた。

九日 早朝に起きる。空が清らかでまるで洗ったかのようであ

る。王敬川と一緒に金華府城の西門から城に入る。金華県の役所の前を通り過ぎる。そこは人々がまるで川の水のようにたくさん流れている。どうやら県の長官が無くなったばかりだからのようだ。（長官は、歙県出身で項士龍という人であり、辛未（一六三一年）の進士であった。五日間の間に、土龍本人の他、彼の父親と彼の三人の息子が相次いで痢病でなくなった。）

さらに東に進み、蘇坊嶺に登る。この嶺ははなはだ平坦で、市街地に挟まれている。東に嶺を下れば、四牌坊（四牌楼）である。蘇坊からここまで来ると、商店がたいへん賑やかである。蘇坊嶺を南に行けば、金華府の役所である。

王敬川と一緒に歙人のやっている麵食堂に入る。麵がとてもおいしい。そこで一人で二人分を平らげた。

そして（再び）西門から城外へ出る。そのまま城壁沿いに西北へ進む。王敬川はなお残惜しげにしてしばらく同行したが、やがて別れた。

まもなく低い丘を登り降りしながら進み、十里で羅店（羅店鎮）に至る。

「三洞はどこにあるのですか」と問う。

すると「前に傾いた尖峯が西側に見えてきたら、その東側にあります」と言う。

（よく分からなかったの、土地の人をつかまえて詳しく聞いてみた。）

（すると）「金華山の中程が鹿田寺である。そこから山脈が東に伸びたものが南に曲がって芙蓉峯となる、これが尖峯です。金華府内の龍脈の起点となります。（鹿田寺から）西の伸びた山脈群が南

に集まったものが三洞となります。三洞の西は、すぐに蘭溪との境界です」と答える。

初めは三洞を経由して蘭溪に取って返ろうかと思ったが、ここから東にも他によい景勝があるのではないかと思い、芙蓉峯へと向かって進むことにする。

羅店から東北に五里で智者寺である。そこは芙蓉峯（尖峯山）の西にあたり、金華山南麓を代表する寺院である。（しかし）今は荒れ果てている。その中で一殿の中に石碑がひとつ残っている。これは陸游が智者大師のためにこの寺を再建したことを記したものであった。その碑文は陸游の揮毫になるものであった。石碑の背には陸游と智者大師の書簡数編を刻んでいた。碑文は楷書で、書簡は行書であった。どちらも趣があるすばらしいものである。おいしいことには職人がいないため、拓本一通を得て楽しみとすることができない。

智者寺の東には芙蓉庵があり、そこから芙蓉峯に登る道がある。私は、芙蓉峯は確かに円錐形で面白いが、その高さは北山の半分にも及ばない、（だから登るまでもない）と考えた。そこでこの峯は登らないことにした。かくして智者寺から西北へ、山路を登る。峯や窪地を登り降りしていると、五里で清景庵に至った。庵僧の道修が引き留めて食事を振る舞ってくれる。その後、私を引率して北の窪地から楊家山に登る。楊家山は北山が南に伸びているその第二層である。さらに南に下れば芙蓉峯で、これが第三層である。

楊家山の西側を廻り、二つの山が挟んでいる間を通って北に向かう。「東が楊家山で、山の辺りに民家が数十軒ある。西が白望山

で、仙人が鹿を眺めたところである。」だいたい七里ほどで、北山が後ろに聳え、楊家山が前面に配置され、その中間に窪地が開ける。そこには巨石が横たわり、空に聳える。その岩を重ねて台が作られており、その上には竹が植えられ房が設けられている。朱開府の別荘であった。「朱の名は大典である。」

その東北は石がさらに壘壘と重なり、大きいものは獅子や象くらしいもあり、小さいものでも鹿や豚くらいである。いずれも草むらの中に蹲っている。これが石浪である。あの黄初平が石を叱りつけて羊に変えた場所であるが、どういうわけか、また石に変化している。

石の上が鹿田寺である。玉女が鹿を駆使して耕地を耕したことで、この名がある。耕地の前に石がある。その形が似ていることから「馴鹿石」という。

「注」智者寺：南朝梁の智者国師婁約の創建と伝える古刹。南宋の嘉泰三年（一一二二）に陸游（一一二五―一二一一）が重修し、「智者寺興造記」を残している。黄初平：晋代の道士で仙人。赤松子ともいう。もと羊飼いで、金華山で長い間修行している内に、羊が石に変わっていた。それに気づいた初平が叱りつけたところ、石がすぐさま羊に戻ったという。鹿田寺：趙宋時代創建と伝える古刹。金華山中の中心地をなしている。今は廃。

【九日途中】

（二〇二二年 三月 三十一日提出）
（二〇二二年 五月 一八日受理）